



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 67

Jan 31, 2018

目次

Report

2

第 35 回有機地球化学シンポジウム開催される
2017 年度有機地球化学賞（学術賞）受賞者決まる
2017 年度研究奨励賞（田口賞）受賞者決まる

Invitation

7

第 36 回有機地球化学シンポジウム 山中 寿朗

People

8

微生物から生命と有機物の世界へ 中川 麻悠子

Information

12

2017 年度総会議事録／年会費納入のお願い

Announcement

28

2018 年度有機地球化学賞（学術賞）候補者推薦の募集
研究奨励賞（田口賞）2018 年度受賞候補者の募集
ROG34 巻へ論文を投稿しましょう！！

編集後記

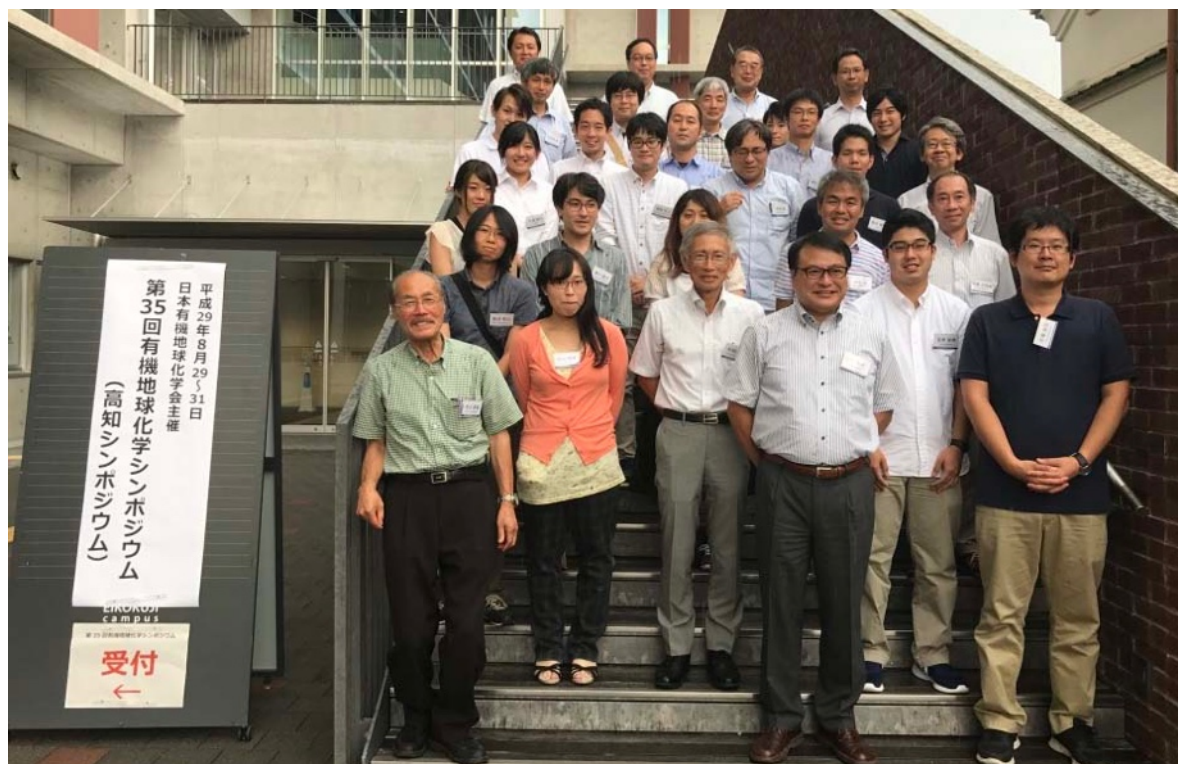
31

Report

第 35 回有機地球化学シンポジウム (2017 年高知シンポジウム) 開催される

第 35 回有機地球化学シンポジウム (2017 高知シンポジウム) が 2017 年 8 月 30～31 日に高知県立大学で開催されました。参加者数は約 40 名で、口頭発表 15 件、ポスター発表 8 件の最新成果が報告され、盛夏の高知で活発な議論が行われました。なお、学生優秀発表賞として、伊佐治雄太さん (東京大学) と宮嶋佑典さん (京都大学) が筆頭となった発表が選ばれました。懇親会では、土佐流の酒宴を楽しんでもらいながら、大いに交流が進んだものと思われます。また、31 日午後には、高知コアセンターの見学会も行われ、盛会のうちにすべての行事が終了しました。参加者の皆様、シンポジウムの準備をサポートしてくださった方々にお礼申し上げます。

(池原実、井尻暁、一色健司)



高知シンポジウム集合写真 (2017 年 8 月 30 日, 高知県立大学)



ポスター発表の様子

懇親会での土佐流おもてなし

2017 年度有機地球化学賞(学術賞)受賞者決まる

2017 年度有機地球化学賞(学術賞)は、同賞受賞候補者選考委員会で審議された後、運営委員会において、山本修一会員と海保邦夫会員に授与することか承認されました。2017 年度総会後に表彰式が行われ、賞状と記念メダルが両会員に贈られました。おめでとうございます。

有機地球化学賞(学術賞)第 14 号

受賞者： 山本 修一 会員(創価大学理工学部・共生創造理工学部)

受賞題目：「植物起源の新規バイオマーカーの分析・同定とバイオマーカーを用いた有機物の起源・環境変動に関する研究」

受賞理由

山本修一会員はこれまで、リグニンをはじめとした維管束植物に由来する新規化合物の同定や簡便な分析方法として tetramethylammonium- hydroxide(TMAH)を用いた熱化学分解法の発展により、維管束植物に由来する新規有機物の質量スペクトルによる同定を行い、lignin phenol(6 種)、lignan(26 種)、cutin acid(4 種)、diterpenoid(22 種)などのバイオマーカーを明らかにしている。また、これまでステロールのメチルエーテル誘導体はほとんど報告されていないが、山本会員らは、TMAH 法による 35 種のステロールメチル誘導体のマススペクトルおよびそれらのフラグメンテーションを解読し、バイオマーカーとして有用であることを示している。本法を様々な地球化学的試料である、海洋や湖沼の沈降粒子、海洋堆積物、湖沼堆積物、古墳土壌、腐植物質、琥珀などに適用し、主に lignin をはじめとした多様な植物由来バイオマーカーに

より、有機物の起源、環境情報の復元、また環境変化に関する研究を行ってきている。特に琵琶湖やバイカル湖堆積物を用いた研究を精力的に実施している。さらに、微生物による植物の分解過程における lignin などの組成変化の研究も行い、微生物による lignin などの変化指標として有用であることを明らかにしている。これらの研究成果は、共著書 8 編、論文 96 編(内審査あり 58 編)にまとめられている。

以上のとおり、山本修一会員は植物起源の新規バイオマーカーの分析・同定とバイオマーカーを用いた有機物の起源・環境変動に関する研究で顕著な学術業績をあげており、有機地球化学賞(学術賞)を受賞するに相応しいと判断される。

有機地球化学賞(学術賞)第 15 号

受賞者： 海保 邦夫 会員(東北大学大学院理学研究科地学専攻)

受賞題目：「堆積有機分子指標による生物の大量絶滅の原因とプロセスの研究」

受賞理由

海保邦夫会員はこれまで、生物大量絶滅期に堆積した有機物中の *n*-アルカン(陸/海棲生物)、カダレン(維管束植物)、ジベンゾフラン(土壌流出)、コロネン + ベンゾピレン + ベンゾペリレン(燃焼)、アリルイソプレノイド(浅海無酸素化)、ジベンゾチオフェン(硫化水素に富む底層水)などの多様な分子指標と同位体比に基づいて、大量絶滅に至った原因やプロセスを解明する研究を共同研究者らと協力して展開している。顕生代に起きた 5 回の大量絶滅のうち、まず 2 回目(デボン紀後期)に関して、土壌の流

出によって海水が濁化するとともに栄養塩供給過剰と浅海の無酸素化に至ったことが大量絶滅の一因であるとした。3 回目（ペルム紀末）の史上最大の大量絶滅に関しては、火山起源の成層圏エアロゾルによって寒冷化が起き、森林崩壊とともに土壌が流出し、浅海の生物生産量の増加から無酸素化に至ったことが原因であると示唆した。さらに 5 回目（白亜紀末）の大量絶滅に関しては、小惑星の衝突による高温化で堆積有機物が燃焼してすすが発生し、成層圏に放出されてすすエアロゾルが形成されたこと、そのエアロゾルによって地球が寒冷化し降水量が減少したことが原因であると推定した。これらの

研究成果は、2012 年から 2017 年の間に 10 編の国際誌論文として公表されるとともに、国際学会で有機地球化学に関する基調講演を 3 回依頼されるなど、世界的に高く評価されている。

以上のとおり、海保邦夫会員は古海洋環境、古気候の復元と生物大量絶滅のプロセス解明に有機地球化学的研究手法を応用することによって、顕著な学術業績をあげており、有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいと判断される。

（有機地球化学賞(学術賞) 受賞候補者選考委員会）

2017 年度 研究奨励賞(田口賞) 受賞者決まる

2017 年度研究奨励賞（田口賞）は、同賞選考委員会で審議された後、運営委員会において、菅原春菜会員に授与することが承認されました。2017 年度総会後に表彰式が行われ、賞状と副賞 5 万円が菅原会員に贈られました。おめでとうございます。

研究奨励賞（田口賞）第 19 号

受賞者：菅原 春菜会員(国立研究開発法人海洋研究開発機構 生物地球化学研究分野
ポストドクトラル研究員)

受賞題目：「窒素含有分子の分子進化と同位体分別に関する実験宇宙化学的研究」

菅原春菜会員は、宇宙における有機分子の分子進化、特に窒素を含む有機分子の進化プロセスの解明に向けて、独創的な有機宇宙化学的研究を行ってきた。特に博士課程までの研究では、隕石や彗星中に存在し、生体の主要成分の一つであり生命の起源と深く関連

するアミノ酸に着目し、天体现象として重要な衝突過程で、アミノ酸が衝撃波を受けてどのように変化するかについて、衝撃銃を用いた実験的な研究で、生成物の定量を緻密に行い、重要な知見を得ている。また、学位取得後、より始原的な分子であるアンモニア、アミンへ研究対象を広げ、太陽系形成以前の星間分子雲から太陽系に至るまでの分子進化に関し、同位体的手法での研究を行い、成果を得ている。なお本研究までに際し菅原会員の報告論文は、2017 年 8 月現在で査読付き欧文誌 5 報（いずれも筆頭著者）、査読付き和文誌 1 報である。また本題目に直接関連する論文はそのうちの 5 報（欧文誌 4 報、和文誌 1 報）である。

菅原会員は受賞時現在（2017 年 8 月）、JSPS 海外特別研究員としてフランスのニース・ソフィア・アンティポリス大学の Uwe Meierhenrich 教授（欧州宇宙機関のロゼッタ

計画（彗星への着陸と彗星物質の観測計画）に関わられており、宇宙における生体関連分子のキラリティ分析とその成因を研究テーマとされている）のもとで新たな分析手法の開発に取り組むと共に、意欲的に研究の裾野を広げようとしている。

以上のように、菅原会員は、宇宙における含窒素有機分子の進化プロセスの解明について優れた有機地球化学的研究を行ない、将来、日本および世界の有機宇宙・地球化学を牽引する研究者となりうると期待できる有望な若手研究者であるため、研究奨励賞（田

口賞）を受賞するに相応しいと判断いたしました。今後の博士のさらなるご活躍を期待しております。

（研究奨励賞（田口賞）選考委員会）

追伸 授賞式当日にご本人は上記の状況の通り、ニース・ソフィア・アンティポリス大で研究されているということで参加が叶わず、ビデオメッセージにてその姿を拝見することとなりました。また菅原会員の研究環境等もビデオにて紹介していただきました。

（山内）

Invitation

今回の第 36 回有機地球化学シンポジウムは、東京での開催です！

第 36 回有機地球化学シンポジウム（東京シンポジウム）

日程：2018 年 8 月 29 日（水）～8 月 31 日（金）

場所：東京海洋大学（品川キャンパス）

※ 8 月 29 日に運営委員会、30-31 日にワークショップを開催。30 日夕方に総会を予定しています。

今回の第 36 回有機地球化学シンポジウムは、2004 年の第 22 回シンポジウム以来の久しぶりの東京開催となります。例年通りですとまだまだ残暑厳しい 8 月末ですが、8 月 29 日（水）～31 日（金）の日程で、品川駅からほど近い、「東京海洋大学品川キャンパス（港区港南 4-5-7）」にてシンポジウムを開催致します。夏休み中の都内は宿泊先の確保などでご不便をおかけするかも知れませんが、早めにスケジュール帳に上記日程を記載頂き、参加の手はずを整えて頂ければ幸いです。

東京海洋大学は、2017 年度より「海洋資源環境学部」が新たに開設され、それまで基本的に海底面より上の世界を研究教育対象として

きたのに加え、海底下へも研究教育領域が広がりました。J-DESC にも加盟し、IODP にも積極的に取り組むこととし、有機地球化学分野の学生もどんどん育てていこうと考えております。まだまだ始まったばかりの学部ですが、活気あるシンポジウムをこの大学で開催することで、有機地球化学分野への理解を深めることにご協力頂ければと、世話人の都合ばかり考えております。世話人の都合など気にせず、皆様にはいつも通りの活発で建設的な議論を熱く繰り広げて頂ければ幸いです。皆様のご参加、お待ち申し上げます！

（世話人：山中 寿朗）



（正門の写真）：海洋大品川キャンパスの正門。奥に見える「白鷹館」の 2 階を会場に予定しています。（鯨の骨）：海洋大マリンサイエンスミュージアムには多数の鯨の完全骨格標本が展示されています。（船の写真）：東京水産大（東京海洋大の前身）の前身である農商務省水産講習所時代に活躍した雲鷹丸。この帆船で捕鯨実習も行われていました。キャンパス内に展示されています。

今回の People は、東京工業大学の中川 麻悠子さんにご寄稿いただきました。

微生物から生命と有機物の世界へ

東京工業大学 地球生命研究所

中川 麻悠子

現在、東京工業大学の地球生命研究所にて研究させていただいております。この度は執筆の機会をいただきありがとうございます。本稿で私のこれまでの経緯について述べさせていただきます。

小中学生の頃にさかのぼりますが、よく遊びに行った香川県の祖父の家が大好きでした。庭に草木が生い茂り、季節毎の果物を楽しみ、少し遠出をして山や蓮華畑で毎年飽きることなく遊び回っていました。そのためか、自然を守れる仕事に携われたらいい、と漠然と思うようになりました。一方で多くの時間は海外ファンタジーや推理小説を読みふけり、ゲーム、パズルなど好きなことをして過ごしていました。思い返すと、本を読みながらいろいろな視点・思考を体験したり、パズルのように忍耐強く一つ一つピースを埋めながら全体を予測し、全体が見えた時の嬉しさと達成感が、今の研究職への道につながったと思います。

高校生の時は数学と物理が好きでしたが、環境に関わるには化学をもっと学んだ方がいいと考え東京工業大学の化学工学科応用化学コースに所属しました。化学は化合物名や特性の暗記が多く苦手だったのですが、大学では暗記だけでなく電子の動きや傾向からあらゆる有機化学反応が進行する様子を学びました。いくつかの法則でその化合物が何故そのような物性なのか、どのように生成するのか、一つの物語を読んでいるような感動を覚えました。卒業研究は新規有機金属錯体合成を行う面白い研究でしたが、実際に自分たちの周囲、自然環境の化合物がどう動い

ているのかを理解したいと思いました。そこで大学院からは安定同位体比を利用した物質循環解析を行っているという吉田尚弘研究室へ進学しました。吉田教授は国内外から引っ張りだこでお忙しい身ですが、研究のことでも進路のことでも相談したいと連絡すると、どのような時でも時間を作って下さり、現状を整理し、次に進む後押しをしていただきました。

吉田研究室では当時テニユア・トラック助教でいらした上野雄一郎博士（現・東京工業大教授）の指導も受けながら成層湖での四種硫黄同位体分析を行い、嫌気層における季節毎の硫酸及び硫化水素動態解析をしました。その際、硫黄循環には微生物が大きく関与しているため、菌相解析と蛍光顕微鏡での観察を高井研博士（JAMSTEC 上席研究員）から教えていただきました。私は分子生物学や顕微鏡の経験がほとんどなく、夜空の星のように輝く微生物を見た時は本当に感動しました。日常では目に見えないマイクロスケールで多くの微生物が存在し、物質循環を担っているのです。そして、同位体比によって、微生物の代謝活動と代謝物が、環境中でどのように生成・消滅し堆積するかを追うことができることを学びました。しかし、微生物活動による硫黄同位体変化は、基質の濃度、鍵酵素の活性状態、温度、電子供与体となる化合物など多くの影響要因があり、過去の培養実験結果から仮定をしながら解析する必要があります。私には基本的な生物代謝の知識が乏しく、何故影響するのかを理解できませんでした。生物系の論文読んでも理解しき

れていない、モヤモヤ感が残りました。そこで、微生物の細胞内で何が起きているのか理解するために微生物学、生化学や有機地球化学の分野へもっと踏み込むことにしました。

そのように細胞内での物質循環を気にし始めていた頃、生物系の学生や研究者と接する機会が増えました。博士後期課程で参加していた GCOE プログラムでは黒川顕教授の温泉メタゲノムの話に興味を持ち、博士号取得後半年間お世話になりました。そこで、実際に手を動かすことで、それまで読めていなかった論文の言葉の意味を理解し、類推することができるようになったのです。環境試料のメタゲノム解析をすると、誰が何の代謝能をもっているかという情報は得られるが、実際にどの代謝が優先して物質循環させているかを明らかにするためには、同時に化学的な情報が必要なのだとわかりました。当時、九州大学の奈良岡浩教授や JAMSTEC の力石嘉人博士（現・北海道大学教授）の論文で中心代謝系を反映する脂肪酸の炭素・水素安定同位体比を利用した解析がとても興味深く、光合成細菌や化学合成細菌が混在する中房温泉のバイオマットへ応用することにしました。中房温泉では温泉源泉から流れる湯川の温度域によって、優占する細菌の代謝物や保有する色素が異なり、白色、橙色、オリーブグリーン色、サーモンピンク色、緑色、と多様な色のバイオマットが 1m 四方内に観察できます。各独立栄養細菌で特有の脂肪酸種から推定される同位体分別が、培養実験報告値範囲と異なっていたり、従属栄養細菌の炭素源がバイオマットによって異なっていたり、管理された純粋培養実験と環境試料の違いについていろいろ考えることが出来ました。その過程で、長年中房温泉で研究されている松浦克美教授や花田智教授を始めとした首都大東京の環境微生物学に関わる研究者や学生から、微生物の生態を理解するためにどのような手法や視点で進めるのかを多く学びました。時間がかかりましたが、近々論文として日の目をみると願っています。

それまでの温泉バイオマットや成層湖での微生物生態系における物質循環解析や今後進めたい微生物代謝の安定同位体的特徴づけの研究は太古代地球の生態系の理解へつながる、という関係から地球生命研究所（ELSI）で研究する機会を得られました。2015 年から米国のジョンテンブルトン財団からの研究予算で発足した ELSI Origins Network (EON) というプロジェクトです。私はラボマネージャーとしてプロジェクト用の実験室立ち上げ・管理を任されながら、研究をしています。ELSI はこれまでの大学研究室のイメージと大きく異なり、国際色豊かで、研究所全体で異分野間の共同研究を推進する工夫がされていました。“地球・生命の起源と進化”という大きな課題に対して、天文・化学進化・生物・地球化学の実験系・理論系研究員が国内外から集まり、お互い研究していることや研究したいことを日常会話や自主的な勉強会の中で話しあいます。特に EON には雇用期間の半分を ELSI、半分以上を海外の研究機関にて研究を進める 10 名の博士研究員が所属し、定期的集まって話しあう中でより親密になりました。特に Donato Giovannelli 研究員は熱水系微生物の代謝過程進化に取り組んでおり、私が代謝毎の同位体分別について生理状態の影響を純粋培養で調べたい、と話したところ、もう一つの研究場所である米国 Rutgers 大学 Costantino Vetriani 研究室で実験することを薦めてくれました。Vetriani 研究室では好熱性嫌気化学合成細菌株を複数保有して、還元 Acetyl-CoA 経路と逆 TCA 回路の進化過程を、ゲノム解析から取り組んでいました。そこで、進化的に重要な逆 TCA 回路をもつ細菌を選び出し、鍵酵素の進化が脂肪酸の同位体分別に反映されるのか、の共同研究が始まりました。対象とする細菌の菌体を取得するため、2017 年 5 月に 1 か月間滞在し、ひたすら好熱性嫌気化学合成細菌の培養をさせていただきました。さらに、光合成の進化に取り組んでいる塚谷祐介研究員（現在は JAMSTEC 所属）からも逆 TCA 回路をもつ光合成細菌を提供してもらおうと共に、嫌気光

合成と酸素発生型光合成の仕組みの進化や人工的に進化させる手法をについて勉強させてもらいました。また、当時 ELSI 研究員で元吉田研究室の博士研究員だった Alexis Gilbert 助教とは、山田桂大准教授とともに代謝物の分子内同位体分布研究を進めています。

学部では有機合成、大学院では無機物の動態解析、博士取得後から有機地球化学と分子生物学など、様々な分野の研究と研究者と知り合ったことにより、生命活動を分子レベル、遺伝子レベルで読み解く視点を鍛えさせてもらっています。そして、ある化合物・元素

が細胞内、細胞間、環境中でどのように生成し、利用され、分解していくのか、という物語を、様々な実験や観測、理論計算などから得られるデータから紡ぎ、イメージできるようにしていきたいです。

今回執筆の機会をいただき、これまでを振り返ることができました。そして語りつくせないほど多くの人に支えられ、応援してもらいながら研究ができていることを改めて実感できました。今後も、様々な分野の研究者とのつながりを大切にしながら、日々精進し、努力したいと思っています。



中房温泉（長野県）の壁面に広がるバイオマットと緑色マットを切り取った層構造のバイオマット



写真 2

生命の起源とは何か、様々な分野の研究員が集まって議論する EON Workshop の集合写真。前列中央が筆者。

2017 年度総会議事録

- 1 日時 2017 年 8 月 30 日（水）16:45～18:00
- 2 会場 高知県立大学 教育研究棟 1 階 A101
- 3 議長選出 国立研究開発法人海洋研究開発機構の井尻暁会員を議長に選出した。
- 4 議事内容 1 事業全般（事業、会計、会計監査）
 - 4.1 2016 年度事業実績報告・会計実績報告・会計監査報告（2016 年 1 月 1 日～12 月 31 日）

以下の内容について事務局および金子監事（事務局が代行）から報告があり、出席者の賛成多数により承認された
 - 4.1.1 2016 年度事業実績
 - (1) Publication 関係
 - ・ニュースレター No.62（2016 年 1 月 7 日）、No.63（3 月 23 日）、No.64（6 月 20 日）発行
 - ・ROG Vol.32 Nos.1-2（2016 年 12 月 30 日）発行、66 ページ
 - (2) Meeting 関係
 - ・学術賞受賞候補者選考委員会（2016 年、email にて）
 - ・田口賞受賞候補者選考委員会（2016 年、email にて）
 - ・運営委員会（2016 年 7 月 3 日、箕面かじかそう 2 階パブリックスペース、ほか email にて随時）
 - ・第 34 回有機地球化学シンポジウム（2016 年 7 月 4 日～5 日、箕面観光ホテル）
 - ・総会（2016 年 7 月 4 日、箕面観光ホテル）
 - ・ROG 編集委員会
 - ・記念事業・マニュアル編集委員会
 - ・将来計画委員会
 - ・共催…日本地質学会 堆積部会所属 4 セッション（2016 年 9 月 10 日～12 日、日本大学）
 - (3) 事務局関係
 - ・ROG の電子化…J-STAGE に ROG 最新号（第 31 巻）登録
 - ・賛助会員の勧誘、ROG の販売促進、シンポジウム協賛の勧誘
 - ・会計処理、会員管理、ホームページの更新、役員選挙
 - ・email による情報配信…日本学術会議からの各種情報、応募案内ほか

4.1.2 2016 年度会計実績

一般会計

大項目	小項目	2016年			コメント
		予算	修正予算	決算	
収入	賛助会費	200,000	200,000	200,000	
	個人会費	180,000	264,000	313,000	会費振替口座参照
	ROG販売	30,000	30,000	2,205	
	シンポ協賛金・剰余金	60,000	100,000	170,000	
	利子ほか	100	206	206	
	計	470,100	594,206	685,411	
前年度繰越金		2,408,790			NL No.65 (2015年度決算)
総計 (=繰越金+決算収入)		3,094,201			
支出	ROG印刷費	300,000	300,000	322,164	
	ROG送料	30,000	30,000	19,980	
	HP維持費	28,000	28,000	28,836	
	シンポジウム費	50,000	300,000	472,634	
	事務局経費・雑費	60,000	60,000	10,708	
	計	468,000	718,000	854,322	
総計 (=収入-決算支出)		2,239,879			次年度繰越金

前年度繰越金は2015年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

会費振替口座残高	604,697
一般会計口座残高	1,635,182

田口基金

大項目	小項目	2016年			コメント
		予算	修正予算	決算	
収入	利子	20	14	14	
	借入	0	0	0	
	計	20	14	14	
前年度繰越金		145,160			
総計 (=繰越金+決算収入)		145,174			
支出	副賞(田口賞)	50,000	0	0	当該年度の受賞者なし
	関連経費	0	0	0	
	計	50,000	0	0	
総計 (=収入-決算支出)		145,174			

前年度繰越金は2015年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

田口基金口座残高	145,174
田口基金定期預金	1,400,000

2016大阪シンポジウム

大項目	中項目	小項目	単価	個数	計	コメント
収入	参加費 (懇親会費込)	正会員(早期)	7,000	16	112,000	
		正会員(最終)	8,000	9	72,000	
		非会員(早期)	8,000	0	0	
		非会員(最終)	9,000	6	48,500	1名懇親会不参加(3500円支払)
		学生会員(早期)	(5,000)	3	0	学生は参加費免除
		学生会員(最終)	(6,000)	1	0	同上
		学生非会員(早期)	(6,000)	10	0	同上
		学生非会員(最終)	(7,000)	6	0	同上
		招待	0	7	0	招待者は参加費免除
		計			232,500	
	助成金	東京地学協会			1,000,000	
	寄附金	奈良岡会員			100,000	使途:学生参加費分
	協賛金	ゲステル株式会社			30,000	学会へ振込
		アジレント・テクノロジー株式会社			10,000	学会へ振込
		株式会社地球科学総合研究所			10,000	
		石油資源開発株式会社			10,000	学会へ振込
		JX石油開発株式会社			10,000	学会へ振込
		サーモ・フィッシャー・サイエンティフィック株式会社			30,000	学会へ振込
		ナノフoton株式会社			20,000	学会へ振込
		日本カンタム・デザイン(株)			20,000	学会へ振込
		ジャスコインタナショナル株式会社			30,000	学会へ振込
		計			170,000	学会振込分の16万円でGoshさんへの旅費支弁
	学会経費	学会繰越金			220,000	
		シンポジウム予備費			50,000	
		雑費			30,000	
		計			300,000	
	合計				1,802,500	
支出	経費	要旨集印刷費			75,600	
		クレジット決済代行(4ヶ月分)			43,442	
		ポスター賞副賞			5,060	
		名札追加分			2,862	
		レーザーポインタ・USB代			3,962	
		コピー代			900	
		計			131,826	
	賃貸料	ワークショップ会場費2日分(税込)			205,200	
		プロジェクタスクリーンセット2日分(税込)			108,000	
		無線マイク2本、2日分(税込)			10,800	
		ポスターパネル			81,972	
		運営委員会会場費			3,000	
		計			408,972	
	招待者	海外招待者旅費 5名			418,800	Goshさん渡航費一部16万円
		謝金(国内・海外) 8名			205,595	
		計			624,395	
	助成金+協賛金相当計				1,165,193	
	飲食費	懇親会費			417,960	
		コーヒー代			48,600	
		お菓子代			7,214	
		計			473,774	
	合計				1,638,967	
収支	収入				1,802,500	
	支出				1,638,967	
収支					163,533	うち東京地学協会助成金残54033円

東京地学協会助成金の残金返還	-54,033	(助成金の代表者:池原実)
日本有機地球化学会への返金合計	109,500	(返金者:藪田ひかる)

会計監査報告

日本有機地球化学会一般会計および田口基金の2016 年度会計を、各帳簿、請求書および領収書、郵便貯金および振替口座、その他提示された証拠書類に基づいて審査した結果、金額が一致したことが確認されましたので、ここに報告致します。

収入については、振り込み額と各費目の予算との照合、帳簿上の残額と口座残額が一致していることの確認を徹底すること。支出については、予算に沿った使用と、大幅な変更の必要が生じた場合には運営委員会での承認を経た適正な執行に努めること。以上、勧告致します。

平成 29 年 8 月 23 日

監事 金子 信行



オンラインシステム導入案について

以下の内容について事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

(1) 問題の背景と提案の経緯

- ・有機地球化学会の年会費（個人会員、学生会員、賛助会員）の入金振替は、財務担当がエクセル上で手作業で管理している。
- ・個人会員、学生会員の方は、ご自身の入金履歴をお忘れになっていることが多々あり、その都度、財務担当に問い合わせが来て、個別対応している。
- ・これらの煩雑さの解消、事務局の管理効率、入金履歴の可視化、そして、電子領収書の発行がオンライン上で簡潔にできるシステム導入を提案する。
- ・学会の繰越金の有効活用の一つとして、本システム導入を行うことにより、会員情報の業務管理もスムーズに進められ、事務局および学会全体の運営基盤は、強化される。

(2) オンラインシステム導入説明会

●日時 2017年9月12日（火）、10:00～12:00

●場所 東京工業大学大岡山キャンパス西6号館W323

（日本地球化学会2017年年会会場の一部：9/12 PM ショートコース講演会 会場）

●議題内容

- ・システム導入イメージ（会員200～300名）の概要
- ・システム導入額(初期費用)：50,000円(税抜)目安
- ・年間維持費：180,000円(税抜)目安
- ・システム作動性のイメージとワークフローの確認
- ・オプションの利用範囲
- ・その他、事務局の負担軽減と効率化および、学会基盤整備に向けて

(3) オンラインシステム業者選定に関する対比表

	選定項目		選定比較					
			A. シクミネット		B. スマートコア		C. エーシーパートナー	
			A. しゅくみねっと株式会社・東京	可否	B. EASTGATE（株）・東京	可否	C. 株式会社ダイナコム・神戸	可否
1	年会費	年会費（個人会費、学生会費、賛助会員）のオンライン決済ができること。	コンビニ決済、ペイジー決済、クレジットカード決済が可能。	◎	A社と同様に多様な決済。	◎	A社と同様に多様な決済。	◎
2		(1)の決済履歴を各会員が閲覧・管理（電子領収書の発行を含む）ができること。	各会員による入金履歴の追跡が可能。	◎	A社と同様。	◎	A社と同様。	◎
3	シンポ参加費	シンポジウム費用（投稿料、参加費、懇親会費、協賛金）等のオンライン決済ができること。	コンビニ決済、ペイジー決済、クレジットカード決済が可能。	◎	A社と同様に多様な決済。	◎	A社と同様に多様な決済。	◎
4		(4)の決済履歴を各会員が閲覧・管理（電子領収書の発行を含む）ができること。	各会員による入金履歴の追跡が可能。	◎	A社と同様。	◎	A社と同様。	◎
5	会員情報	会員（個人会費、学生会費、賛助会員）の情報管理が、各会員IDで、各会員自身が可能であること。	IDとPWの自動発行により、簡潔に、管理可能。	◎	A社と同様。	◎	A社と同様。	◎
6	機能拡張性、費用対効果	上記(1)～(5)以外の必要が生じた場合に、システムの機能拡張性があること。	システムの機能拡張性が可能。	◎	機能拡張性が極めて高い。企業の顧客管理サービスまでは、必要なし。	×	機能拡張性が極めて高い。企業の顧客管理サービスまでは、必要なし。	×
7		上記(1)～(5)のシステム導入費・維持費が、本学会規模に即しており、合理的であること。	200～300名規模の学会組織運営に合致し、費用対効果が期待できる。	◎	大規模会員が対象、高コストすぎる。	×	大規模会員が対象、高コストすぎる。	×
			・システム導入(初期費用)：50,000円 ・年間維持費：180,000円	◎	別添参照	×	別添参照	×
選定評価			◎		△		×	

【参考】会費および会員情報を電子化している関連学会

- ・日本地球惑星科学連合（のべ会員数 > 38,000名）公益社団法人
- ・日本地球化学会（会員数 < 1,000名）日本学術会議登録学術研究団体（法人化手続き中）

- ・日本惑星科学会（会員数 > 500 名）日本学術会議登録学術研究団体（法人化手続き中）
- (4) 会費収納・会員管理システム「しくみネット」導入とそれにかかわる計画
- ・しくみネット初期費用（8 万円）は、これまでの繰越金を活用する。
 - ・しくみネット維持費（年額 20 万円）の負担に関する財務担当案は以下のとおり。

正会員の年会費とシンポジウム参加費から捻出する場合

正会員年会費 1,000 円の値上げ $\times 110$ 名 = 110,000 円の捻出

シンポジウム参加費 2,000 円の値上げ $\times 50$ 名 = 100,000 円の捻出

●日本有機地球化学会会則改定（案）

第 6 条 会員は次の種別に従って会費を毎年度前納するものとする。

【現行】正会員：年額 2,000 円

【改定】正会員：年額 3,000 円

4.2 日本有機地球化学会の法人化について

以下の内容について将来計画委員会から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

(1) 法人化検討の経緯

- ・学会の預金口座の住所変更が難しくなった。
 - 以前開設した学会名の郵便預金口座を用い、会計担当が会費徴収等の入金業務を行っていた。
 - 会計担当が変わる毎に、預金口座の住所変更を行って対応して来た。
 - 法律が厳しくなり、法人化されていない任意団体（学会）が預金口座を開設することが難しくなった。近年は預金口座の住所変更の際、合法的な組織である証明を強く求められた。
- ・マイナンバー制度が導入され、法人にも「法人番号」が付与されている。
 - 今後は任意団体のままでは、「預金口座を持つこと」自体出来なくなる可能性が高い。
- ・そこで将来計画委員会として、学会の「法人化」を検討し、ロードマップが出来たので、その実行を提案する。

(2) 法人化のメリット・デメリット

- ・メリット
 - 社会的な信用が得られる。
 - 法人名で契約ができる。
 - 資産が持てる。
 - 銀行口座が開設できる。
 - 寄付金を集めやすい。
- ・デメリット
 - 法人化の際の費用、さらに毎年維持費が必要となる。
 - 役員変更の届け出や確定申告等、書類作成・手続きが増える。

(3) 法人化の手続きと注意点

- ・手続き
 - 構成員を 2 名以上集め、法人化を発議する。
 - 定款案を作成する。
 - 設立時役員を選任する。
 - 公証役場で定款の認証を受ける。
 - 設立時役員が設立手続の調査を行う。

- 法務局に設立登記の申請をする。申請日が設立日となる。
- 税務署等に各種届出を行う。
- ・ 注意点
 - 法務局への法人の登記手続きは、司法書士のみが実施できる。
 - 「主たる事務所」の所在地を管轄する法務局で、登記する必要がある。
 - 移転は可能だが、「主たる事務所」の移転登記を行う必要がある。
 - 2年毎に役員変更の登記が必要となる。
 - 「非営利型一般社団法人」を選べば非課税となるが、毎年税務署に確定申告を行う必要がある。

(4) 法人化のコスト概算

大項目	小項目	法務局、公証 役場等支払い	行政書士等 外注費	合計(円)
法人化費用	定款作成等	0	300,000	300,000
	定款認証	52,000		52,000
	法人登記	60,000		60,000
	計	112,000	300,000	412,000
維持費用	名称変更	30,000	30,000	60,000
	事業目的 変更	30,000	30,000	60,000
	住所変更 (管轄内)	30,000	30,000	60,000
	住所変更 (管轄外)	60,000	40,000	100,000
	役員変更	10,000	30,000	40,000
事務局運営代行			?	?

(5) 法人化の課題

- ・ 法人化の際の費用、またその後の維持費が掛かる。
 - 会員数 200 名の学会にとって負担にならないか。
 - 会費を値上げしなくてはならないか。
- ・ コスト面から法人化を見送るオプションもあるが、近い将来、預金口座の所有や住所変更ができなくなる、という問題が残る。
 - 根本的な解決にはならず、他の学会も進めているので、法人化は急務。
- ・ 法人化するには、事務所所在地を決める必要があるが、現在の事務局（事務局長の所属組織）で良いか。
 - 事務局長が変更される毎に変更が必要で、手間とコストが掛かる。
 - 受け入れ組織の了承が必要ではないか。
- ・ コスト削減のためには、事務所所在地を固定した方が良いが、引き受けてくれるところがあるか。
 - 会員数が多い組織に事務所を置かせて頂く。
 - 事務所運営を代行する業者はいるが、コストが掛かれば固定化のメリットがない。

(6) 法人化のロードマップ

- ・ 2017 年 8 月：総会で法人化の実行および予算の承認を得る。
 - － コメントやリクエストが出た場合には、それをクリアすることを前提に承認を頂く。
- ・ 2017 年 9～12 月：事務所所在地および運営方法の再検討。
 - － 現事務局、他の候補地、運営業者に委託。
- ・ 2018 年 1～3 月：定款案を作成する。
 - － 事務所の所在予定地で外注する司法書士を選定し、作業開始。
- ・ 2018 年 4～6 月：会員からの意見を集約。
 - － ホームページ等で定款案を公開し、必要あれば定款案を修正。
- ・ 2018 年 7 月：公証役場で定款の認証を受ける。
- ・ 2018 年 8 月：運営委員会を経て、総会で法人設立を決議。
 - － 定款および役員についても承認を得る。
- ・ 2018 年 9 月：事務所所在地で法人の登記を行う。

4.3 2017 年度事業中間実績報告・事業中間計画提案・会計中間実績報告・会計中間見通し報告

以下の内容について事務局から報告と提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

4.3.1 2017 年度事業中間実績（2017 年 1 月 1 日～6 月 30 日）

(1) Publication 関係

- ・ ニュースレター No.65（2017 年 1 月 18 日）、No.66（2017 年 7 月 4 日）発行

(2) Meeting 関係

- ・ 運営委員会 (email にて随時)
- ・ 学術賞受賞候補者選考委員会 (2017 年 5 月～7 月、email にて)
- ・ 田口賞受賞候補者選考委員会 (2017 年 5 月～7 月、email にて)
- ・ シンポジウム実行委員会 (email にて随時)
- ・ NL 編集委員会(email にて随時)
- ・ ROG 編集委員会
- ・ 記念事業・マニュアル編集委員会
- ・ 将来計画委員会

(3) 事務局関係

- ・ 賛助会員の勧誘、ROG の販売促進、シンポジウム協賛の勧誘
- ・ 会計処理、会員管理、ホームページの更新
- ・ 事務局会議 (2017 年 7 月 11 日、JAMSTEC 東京オフィス、第 1 回オンラインシステム説明会)
- ・ email による情報配信…日本学術会議からの各種情報、応募案内ほか

(4) 選挙関係

- ・ 会長・副会長・運営委員・監事選挙 (2017 年 7 月 4 日 公示、8 月 10 日 無投票当選決定)

4.3.2 2017 年度事業中間計画（2017 年 7 月 1 日～12 月 31 日）

(1) Publication 関係

- ・ ROG Vol. 33 No.1 および No.2 発行

(2) Meeting 関係

- ・ 運営委員会 (2017 年 8 月 29 日、高知県立大学 教育研究棟 1 階 A106 教室、email にて随時)
- ・ 第 35 回有機地球化学シンポジウム(2017 年 8 月 29 日～31 日、高知県立大学)
- ・ 総会 (2017 年 8 月 30 日、高知県立大学 教育研究棟 1 階 A101 教室)

- ・運営委員説明会（2017年9月12日、東京工業大学大岡山キャンパス西6号館W323室、第2回オンラインシステム導入説明会）
- ・NL編集委員会(emailにて随時)
- ・ROG編集委員会
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・将来計画委員会（法人化ロードマップ）
- ・共催…日本地質学会第124年学術大会（2017年9月16日～18日、愛媛大学）

(3) 事務局関係

- ・会計処理、会員管理、ホームページの更新
- ・会費収納・会員管理システム「しくみネット」の導入
- ・emailによる情報配信…日本学術会議からの各種情報、応募案内ほか

4.3.3 2017年度会計中間実績（2017年1月1日～6月30日）および中間見通し

一般会計

大項目	小項目	2017年度					コメント
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	増減	
収入	賛助会費	200,000	200,000	140,000	60,000	0	
	個人会費	180,000	180,000	68,000	112,000	0	
	ROG販売	30,000	30,000	0	2,000	0	
	シンボ協賛金・剰余金	60,000	60,000	60,000	0	0	
	利子ほか	100	100	0	100	0	
	計	470,100	470,100	268,000	174,100	0	
前年度繰越金		2,239,879	2,239,879			0	
総計		2,709,979	2,709,979			0	
支出	ROG印刷費	300,000	300,000	251,316	0	0	
	ROG送料	30,000	30,000	11,016	0	0	
	HP維持費	28,000	28,000	0	28,000	0	
	シンポジウム費	50,000	50,000	0	50,000	0	高知シンボ2017
	事務局経費	60,000	120,000	0	80,000	60,000	学会賞2名、オンラインシステム導入
	総計	468,000	528,000	262,332	158,000	60,000	
次年度繰越金		2,241,979	2,181,979			-60,000	

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

田口基金

大項目	小項目	2017年度					コメント
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	増減	
収入	利子	14	14	0	14	0	
前年度繰越金		1,545,174	1,545,174	0		0	
総計		1,545,188	1,545,188	0		0	
支出	副賞(田口賞)	50,000	50,000	0	50,000	0	高知シンボ2017 田口賞1名
次年度繰越金		1,495,188	1,495,188	0		0	
総計		1,445,188	1,445,188	0		0	

前年度繰越金は今年度決算により修正（次年度繰越金も連動）

4.4 2018年度事業計画提案・会計計画提案（2018年1月1日～12月31日）

以下の内容について事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

4.4.1 2018年度事業計画

(1) Publication 関係

- ・ニュースレター No.67、No.68 発行
- ・ROG Vol.34 発行

(2) Meeting 関係

- ・第36回有機地球化学シンポジウム
- ・総会
- ・運営委員会
- ・学術賞受賞候補者選考委員会
- ・田口賞受賞候補者選考委員会
- ・シンポジウム実行委員会
- ・NL編集委員会
- ・ROG編集委員会
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・将来計画委員会（法人化ロードマップ）

(3) 事務局関係

- ・賛助会員の勧誘、ROGの販売促進、シンポジウム協賛の勧誘
- ・会計処理、会員管理、ホームページの更新、「しくみネット」の運用、ROG電子化（J-STAGE）
- ・emailによる情報配信…日本学術会議からの各種情報、応募案内ほか

4.4.2 2018年度会計計画

一般会計

大項目	小項目	2016年度	2017年度	2018年度	コメント
		決算	修正予算	予算	
収入	賛助会費	200,000	200,000	200,000	
	個人会費	313,000	180,000	300,000	正会員費の値上げ(現状+1,000円の試算ベース)
	ROG販売	2,205	10,000	30,000	
	シンポ協賛金・剰余金	170,000	60,000	60,000	
	シンポ参加費	0	0	100,000	参加費の値上げ(現状+2,000円の試算ベース)
	利子	206	100	100	
	計	685,411	450,100	690,100	
前年度繰越金		2,408,790	2,239,879	2,161,979	
総計		3,094,201	2,689,979	2,852,079	
支出	ROG印刷費	322,164	300,000	300,000	
	送料	19,980	30,000	30,000	
	HP維持費	28,836	28,000	28,000	
	シンポジウム費	472,634	50,000	50,000	高知シンポジウム2017
	事務局経費・雑費	10,708	120,000	200,000	(オンラインシステム維持費)
	法人登記費	0	0	450,000	(将来計画委員会+松江事務局)
	計	854,322	528,000	1,058,000	
次年度繰越金		2,239,879	2,161,979	1,794,079	

田口基金

大項目	小項目	2016年度	2017年度	2018年度	コメント
		決算	修正予算	予算	
収入	利子	14	14	14	
前年度繰越金		1,545,160	1,545,174	1,495,188	
総計		1,545,174	1,545,188	1,495,202	
支出	副賞(田口賞)	0	50,000	50,000	2017年度受賞者1名
総計		1,545,174	1,545,188	1,495,202	
次年度繰越金		1,545,174	1,495,188	1,445,202	

5 議事内容 2 役員および会則

5.1 2017 年度日本有機地球化学会役員選挙結果

以下の内容について選挙管理委員会（事務局が代行）から報告があった。

2017 年 8 月 10 日

日本有機地球化学会事務局 御中

日本有機地球化学会選挙管理委員会
柏山 祐一郎・山本 真也・金子 雅紀

2017 年度日本有機地球化学会役員選挙結果について

残暑の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。さて、表題の件につきまして、選挙管理委員会では 6 月 30 日から 7 月 14 日にかけて、各役職の立候補および推薦の受付を行ないましたところ、下記の通り、会長に 1 名、副会長に 1 名、運営委員に 11 名、および監事に 1 名の立候補ないし推薦がございました。11 名の候補者があがった運営委員に関しては、選挙管理委員会での協議の結果、定員の「10 名程度」として許容される範囲であると判断いたしました。従って、選挙細則第 4 条(4)「候補者が定数を超えない場合は、候補者全員を無投票当選とする。」に従い、当選挙管理委員会との結論として、全ての候補者を無投票当選と判断いたします。

記

[会長]	鈴木 徳行（北海道大学）
[副会長]	早稲田 周（石油資源開発（株））
[運営委員]	稲場土誌典（国際石油開発帝石（株））
	大場 康弘（北海道大学）
	坂田 将（産業技術総合研究所）
	沢田 健（北海道大学）
	高野 淑識（海洋研究開発機構）
	奈良岡 浩（九州大学）
	藪田ひかる（広島大学）
	山内 敬明（九州大学）
	山中 寿朗（東京海洋大学）
	山本 正伸（北海道大学）
	山本 真也（富士山科学研究所）
[監事]	金子 信行（産業技術総合研究所）

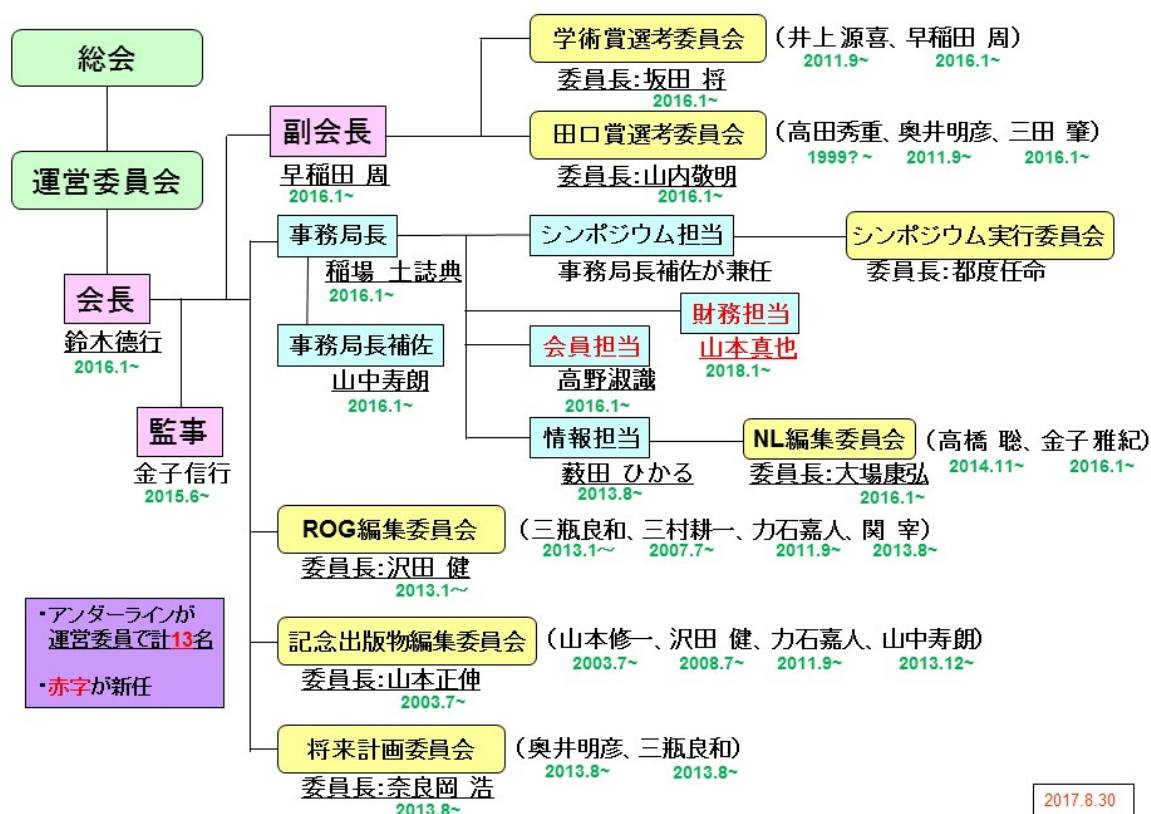
以上

5.2 2018～2019 年度日本有機地球化学会役員・組織報告

鈴木会長より、選挙で選出された役員およびその他の委員の役職と組織について以下の報告があった。

2018-2019

日本有機地球化学会組織図



5.3 会則改正

以下の内容について事務局から提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

●日本有機地球化学会会則

【現 行】第3条 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。

(4) 学会奨励賞（田口賞）の授与

【改正案】第3条 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。

(4) 研究奨励賞（田口賞）の授与

【提案理由】会則の表記に誤りがあるため、学会奨励賞を研究奨励賞に改める。

【現 行】第8条 本会の役員として、会長1名、副会長1名、運営委員10名程度、監事1名を置く。

【改正案】第8条 本会の役員として、会長1名、副会長1名、理事10名程度、監事1名を置く。

【提案理由】学会役員の名称として一般的であり、法人化後の呼称にも対応でき、2018年度からの新役員呼称として移行可能であるため。

6 議事内容3 各委員会活動

6.1 学術賞選考委員会報告

坂田委員長より以下の学術賞選考結果の報告があった。

- ・受賞者1 山本 修一 会員
- ・所属・職名 創価大学理工学部・共生創造理工学部教授
- ・研究題目 植物起源の新規バイオマーカーの分析・同定とバイオマーカーを用いた有機物の

- 起源・環境変動に関する研究
- ・研究業績 査読付き原著論文 58 編
共著書 8 編
- ・受賞者 2 海保 邦夫 会員
- ・所属・職名 東北大学大学院理学研究科地学専攻教授
- ・研究題目 堆積有機分子指標による生物の大量絶滅の原因とプロセスの研究
- ・研究業績 国際誌論文 (2012～2017 年) 10 編
国際学会での基調講演 3 回

6.2 田口賞選考委員会報告

山内委員長より以下の田口賞選考結果の報告があった。

- ・受賞者 菅原 春菜 会員
- ・所属・職名 国立研究開発法人 海洋研究開発機構 生物地球化学研究分野 ポストドクトラル研究員
- ・研究題目 窒素含有分子の分子進化と同位体分別に関する実験宇宙化学的研究
- ・研究業績 国際誌論文 (筆頭) 5 編
国内誌論文 (筆頭) 1 編

6.3 ROG 編集委員会報告

沢田委員長より以下の報告と投稿規定の改正提案があり、出席者の賛成多数により承認された。

(1) ROG Vol.33, No.1 編集状況

- ・論文：技術論文 1 編
- ・2017 年 9 月刊行予定(PDF ファイルを Web 公開、印刷は 12 月以降)
- ・Vol.33, No.2 は 2017 年 12 月に刊行予定

(2) 学術賞および奨励賞 (田口賞) 受賞記念論文

- ・学術賞受賞記念論文：2013 年度受賞者 坂田会員に執筆を依頼している。Vol.33 に掲載予定。
- ・奨励賞(田口賞)受賞記念論文：2015 年度受賞者 中村英人会員に執筆を依頼している。Vol.33 に掲載予定。

(3) 「議論(Discussion)」新設のための投稿規定の改正理由

- ・ROG では「議論(Discussion)」という論文カテゴリーを加えることが、4 年前の運営委員会 (岡山シンポジウム) において承認されている。新設の意図は、学会における研究成果の自由討論を行う場をつくり、学会の活性化を図ろうというものである。GCA や OG などの国際誌にある'Discussion'と同様のものである。
- ・今回、「議論(Discussion)」の新設のために、投稿規定を改正したい (これも 4 年前の運営委員会で承認されている)。

(4) 「議論(Discussion)」新設に伴う投稿規定の改正箇所

2. 投稿原稿

投稿原稿は、有機地球化学に関して価値ある内容のもので、印刷物として未発表のもので、以下のいずれかのものである。1) 論文 (articles)、2) 短報 (short articles)、3) 技術論文 (technical papers)、4) 総説 (reviews)、5) 議論 (discussion)。これらのうち 1)-3) は原著論文 (original papers) である。5) 議論は、これまでに報告された論文に対しての異なる意見や修正の指摘、それに関わる議論などを記述したものである。

7 議事内容 4 その他

以下の各報告が早稲田副会長と事務局からあった。

7.1 来年度のシンポジウム開催場所

(1) 経緯

- ・2017 年度 前回の開催から 10 年ほど経過した高知大学に 2017 年度の開催を打診したところ、快諾していただいた（代表世話人は池原実会員）。
- ・2018 年度 東京海洋大学へ異動された山中会員から世話人を引き受けたい由、申し出があり、東京近郊で開催する方向で検討中である（代表世話人は山中寿朗運営委員）。
- ・2019 年度 前回の開催から 10 年以上経過している金沢大学で長谷川卓会員が引き受けてくださる予定である。

(2) 第 36 回有機地球化学シンポジウム（2018 年品川シンポジウム）開催計画案

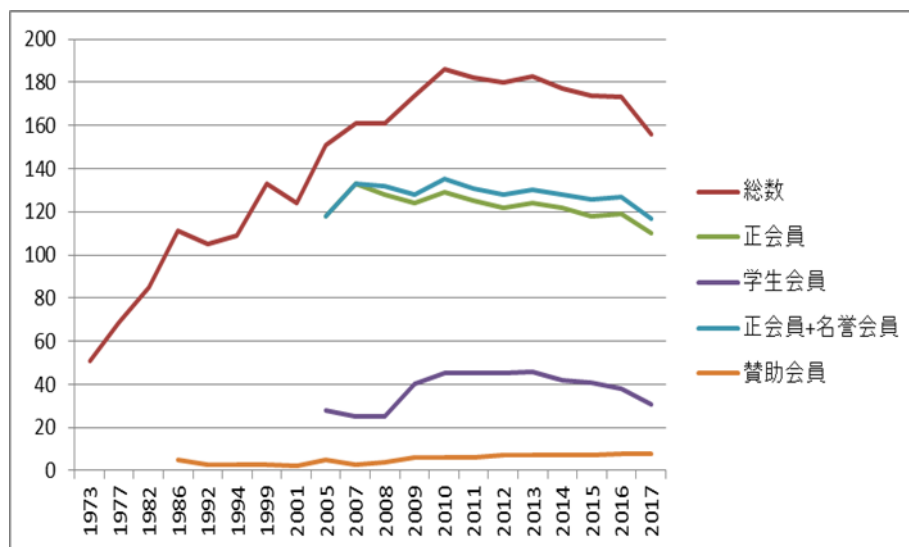
- ・日 程 2018 年 8 月下旬～9 月上旬
- ・会 場 東京海洋大学（品川キャンパス、東京都港区港南 4-5-7）
- ・世話人 山中寿朗運営委員（東京海洋大学海洋資源環境学部）

7.2 会員の現況（2017 年 8 月 25 日現在、敬称略）

(1) 経緯

- ・入会（7 名）
 - 正会員 井尻 暁
 - 学生会員 堀 耀太、伊左治雄太、矢能冴紀、小池恒太郎、宮嶋佑典、重野洋人
- ・退会（1 名）
 - 正会員 山室真澄
- ・物故（1 名）
 - 名誉会員 相原安津夫
- ・除籍見込み（6 名）
 - 正会員 2 名
 - 学生会員 4 名
- ・カテゴリー変更（2 名）
 - 学生→正会員 氏家雅貴、風呂田郷史
- ・現況 156 名（2016 年度 173 名）
 - 正会員 111 名（2016 年度 119 名）
 - 学生会員 30 名（2016 年度 38 名）
 - 名誉会員 7 名（2016 年度 8 名）
 - 賛助会員 8 社（2016 年度 8 社）

・会員数の推移（1973～2017 年）



7.3 ROG 電子化：「電子図書館」から「J-STAGE」への移行

(1) 概要

- ・ ROG は国立情報学研究所（NII）が運営する「電子図書館（NII-ELS）」に 1 巻から 30 巻まで公開してきた（一部の技術論文を除く*）。しかし、国が学協会誌の電子化に対する支援を科学技術振興機構（JST）が運営する J-STAGE に一本化するという方針を示したため、NII は 2016 年 3 月 31 日に電子化の受付を終了し、2017 年 3 月にはサービスを終了した。
- ・ これを受けて ROG は 31 巻から J-STAGE に移行することになり、31 巻の初回 J-STAGE 登載後、1 巻から 30 巻についても J-STAGE へ移行することになった。2016 年 9 月～2017 年 4 月に作業を行い、J-STAGE 上での全巻公開を完了した。
- ・ ROG Vol.19～24 の技術論文（全部で 18 編）は、記念事業（地球・環境有機分子質量分析マニュアル）との関係から NII-ELS に掲載しなかった。このため、J-STAGE にも未掲載である。学会 HP には掲載されている。今後、J-STAGE への追加は可能である。

(2) 作業の詳細（2016 年度総会以降の主な作業）

- ・ 2016 年 9 月中下旬 ROG Vol.31 No.1 の初回登載作業。
- ・ 2016 年 10 月 24 日 Vol.31 No.1 公開。
- ・ 2016 年 10 月下旬 Vol.31 No.2 の登載作業。
- ・ 2017 年 3 月 Vol.32 の登載作業。
- ・ 2017 年 4 月 4 日 Vol.32 公開。
- ・ 2017 年 4 月 18 日 Vol.30 までの修正・公開作業を完了。

7.4 学会共催

- ・ 日本地質学会の堆積部会所属 4 セッション（2017 年 9 月 16 日～9 月 18 日、愛媛大学）
昨年に引き続き地質学会の堆積部会所属の下記 4 セッションを本会が共催する。
 - ・ 石油・石炭地質と有機地球化学
 - ・ 堆積物（岩）の起源・組織・組成
 - ・ 炭酸塩岩の起源と地球環境
 - ・ 堆積過程・堆積環境・堆積地質

この共催により、本学会会員（学生会員も含む）の参加登録費は地質学会会員と同額となり、これらのセッションで発表が可能となった。なお、共催に関して本学会の経済的な負担は生じなかった。

7.5 その他

- ・学会ホームページにおける賛助会員のバナー広告掲載
 - 賛助会員 株式会社クリムゾンインタラクティブから提案があった。
 - 賛助会員 8 社のバナー広告を掲載予定である。

以上

【会員各位へのお願い】 日本有機地球化学会 2018 年 年会費のお支払について

日本有機地球化学会会則（2017年 8月30日 改定）により、2018年から正会員の年会費は、3,000円に変更されました。

皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

日本有機地球化学会 事務局
(管理委託：会員管理サービス「シクミネット」)

正会員 年額 3,000円 (2018年1月1日～)

学生会員 年額 1,000円

賛助会員 年額 1口 20,000円, 1口以上

会費振込先 シクミネットによるオンライン決済システム
(コンビニ、ペイジー、クレジットカード)

【ご案内】

- (1) 会員の皆様へは、IDとパスワードを順次お送りします。
- (2) 新規会員の皆様へは、ご入会される際に、お手続きの方法をご案内いたします。
- (3) 複数年の前払いをされている会員で不足分がある会員様には、差額徴収について、個別にご連絡します。
- (4) 2017年以前で未入金がある会員様へは、個別にご連絡します。

本件に関するお問い合わせは、
日本有機地球化学会事務局 office@ogeochem.jp

まで、よろしくお願いいたします。

Announcement

2018 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集

有機地球化学賞（学術賞）2018 年度受賞候補者選考委員会

委員長 坂田 将

有機地球化学賞（学術賞）受賞者選考規則により、2018 年度同賞選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえご推薦ください。

記

候補者の資格：有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、書留で郵送すること。（同内容のものを電子メールでも提出してください）

- 1) 候補者の履歴（大学卒業以降の学歴、職歴、その他）
- 2) 推薦の対象となる研究題目および推薦理由
- 3) 研究業績目録（推薦の対象となる主要な論文 10 編）
- 4) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2018 年 5 月 31 日（木）（当日消印有効）

提出および問い合わせ先：〒305-8567 つくば市東 1-1-1 中央第 7

産業技術総合研究所 地圏資源環境研究部門

地圏微生物研究グループ 坂田 将

電話 029-861-3898：ファックス 029-861-3666

E-mail : su-sakata@aist.go.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>

（日本有機地球化学会HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

研究奨励賞（田口賞）2018 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞（田口賞）2018 年度受賞候補選考委員会

委員長 山内 敬明

研究奨励賞（田口賞）受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては下記をご参照のうえ、受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が1984年4月2日以降であり、有機地球化学、石油地質学、堆積学の3分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。推薦の方法：A4サイズの用紙に下記事項を任意の形式で記述し、郵送するか、PDFファイルとしてE-mailに添付してお送り下さい。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷りまたはコピー
- 4) 履歴書
- 5) 推薦者の氏名と連絡先

* 会員の皆様におかれましては、是非とも候補者ご推薦のほどお願い致します。

締め切り日：2018 年 5 月 31 日（水）（当日消印 有効）

提出及び問い合わせ先：〒819-0395 福岡市西区元岡744九州大学大学院理学研究院

地球惑星科学部門 山内敬明

電話：092-802-4217 ファックス（電話に同じ）：092-802-4217

E-mail：yamauchi.noriaki.439@m.kyushu-u.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>（日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

ROG 33 巻 1 号が近日公開 ROG 34 巻へ論文を投稿しましょう！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、WEB 公開および冊子を発行しております。2017 年 12 月 29 日に ROG Vol.33, No.1 が発行され、2018 年 1 月に WEB 公開される予定です。また、ROG Vol.33, No.1 の冊子を 2018 年 2 月初め頃に本学会会員の皆様の下に郵送にてお届けできると思います。この数年は 1 年間に複数号を刊行していましたが、2017 年巻 (Vol.33)は受理された論文が少なかったために 1 号(No.1)のみの刊行になります。ROG は会員皆様の論文投稿で成り立っておりますので、積極的なご投稿をどうぞよろしくお願いいたします。ROG Vol. 34 への論文投稿はすでに受け付け体制にあります。ROG Vol.34, No. 1 は 2018 年 6 月頃、No. 2 以降は 2018 年 10 月以降に WEB 公開する予定で進めております。冊子体はこれまでと同様に 12 月頃の発行を予定しております。重ねて申し上げますが、皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

ROG Vol.33 から、「議論(Discussion)」という新しい論文のカテゴリーが加わりました。議論(Discussion)は、これまでに報告された論文に対しての異なる意見や修正の指摘、それに関わる議論などを記述したものです。この新設によって、積極的に研究成果を議論する場

がつくられます。研究成果に対する自由な議論を公表することは、対象となった研究論文の精査のみならず、その研究領域、さらには研究分野の発展を促すことになると思います。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(discussion)になります。有機地球化学シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、ROG Vol.33 の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿：
sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
北海道大学 大学院理学研究院 地球惑星科学
部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記：

あけましておめでとうございます。今年も会員みなさまに多くの情報を提供できるよう、編集委員一同頑張ります。(大)

本年もどうかよろしくお願い致します。寄稿依頼を引き受け執筆頂いた皆様、ありがとうございました。(高)

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。今回は編集作業を担当させて頂きました。(金)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 鈴木 德行
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門
Phone&Fax: 011-706-2730

日本有機地球化学会事務局
〒107-6332 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー
国際石油開発帝石株式会社 技術本部 評価技術ユニット内
事務局長 稲場 土誌典
Phone: 03-5572-0263, Fax: 03-5572-0269
e-mail: office@ogeochem.jp
ゆうちょ銀行口座 00110-7-76406 (名義人 日本有機地球化学会)

編集者 大場 康弘(北海道大学低温科学研究所) 金子 雅紀(産業技術総合研究所) 高橋 聡(東京大学大学院理学研究科)
e-mail: news@ogeochem.jp

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。
アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>